

事業報告

(2025年4月1日から2026年3月31日まで)

1. 事業の経過及びその成果

当研究所は、農薬等の残留及び毒性に関する各種試験及び調査研究等を行うことにより、その安全性の確保を図り、もって人の健康の保護及び環境の保全に寄与することを目的として、農薬等の残留性及び毒性に関する各種試験の受託、調査研究、技術及び知識の普及並びに試験及び試験成績についてのコンサルテーションを行っている。さらに、その他研究所の目的を達成するために必要な事業を行うこととしている。

研究所の主な収益源である各種試験の受託と登録申請に係る試験及び試験成績のコンサルテーションについては、4.(1)に本年度及び前年度の件数を比較表示したが、1件ごとに要する期間も規模も異なるため、件数のみでこれらの事業の成果を説明することは困難であり、3.の財産及び損益等これらを総合的に勘案して判断する必要がある。

調査研究については4課題であり、公益目的支出計画対象事業として、化学部1件及び毒性部3件について実施するとともに、IETセミナーを開催し、外部講師による講演と職員2名の研究発表を行った(4.(3)参照)。一方、公益目的支出計画実施対象事業以外に実施した調査研究の成果は附属明細書に記載した。

技術及び知識の普及については、大学への非常勤講師の派遣1件、講演会等への講師等の派遣2件、研修生の受入れ3件及び見学者の受入れ2件、また、海外を含む委員会等への委員派遣は19件であった(4.(4)参照)。

その他研究所の目的を達成するために必要な事業については、事業の継続に必要なリスク管理の遂行に努めた。また、今後の事業展開に必要な検討課題及び改善事項として、組織の見直し等、国際実験動物ケア評価認証協会(AAALAC International)の認証維持、試験データの品質管理強化及び試験業務の効率化、施設整備計画を着実に実施した(4.(5)参照)。

当期の経常収益は約21億4千万円となり、受託試験数の減少に伴い昨年度に比べ約1億3千5百万円の減少となった。また、資材費等価格高騰による経常費用の増加もあり、税引前当期一般正味財産増減額は、△1億3千9百万円を計上した(3.参照)。

2. 資金調達等の状況

(1) 資金調達

該当なし

(2) 設備投資

ア. 重要な固定資産の取得

・トリプル四重極型ガスクロマトグラフ質量分析計 GCMS-TQ8040NX

金額：21,725,000円(本体19,750,000円 消費税1,975,000円)

・四重極飛行時間型質量分析計 UPLC/APGC/Xevo G3 QTOF システム
金額：66,000,000 円（本体 60,000,000 円 消費税 6,000,000 円）

・実験動物用精子運動性自動解析装置
金額：16,000,000 円（本体 14,545,455 円 消費税 1,454,545 円）

イ. 重要な設備の新設、増設等

・建築設計・監理業務委託契約：2025 年 7 月 9 日締結

契約者：ヒラカワオフィス（一級建築士）

（協力建築士事務所：株式会社アスタプラン 一級建築士事務所）

対象工事：①第 4 実験棟建設（鉄骨造 2 階建て延べ面積 1,122.15 m²）

②第 2 実験棟改修工事

金額：60,500,000 円（本体 55,000,000 円 消費税 5,500,000 円）

・第 4 実験棟建設工事 準備工事契約：2025 年 11 月 13 日締結

契約者：前田建設工業株式会社

工事期間：着工 2025 年 12 月 15 日

竣工 2026 年 4 月 30 日

金額：37,400,000 円（本体 34,000,000 円 消費税 3,400,000 円）

・第 4 実験棟建設工事契約：2026 年 2 月 17 日締結

契約者：前田建設工業株式会社

工事期間：着工 2026 年 3 月 1 日

竣工 2027 年 11 月 15 日

金額：1,116,500,000 円（本体 1,015,000,000 円 消費税 101,500,000 円）

ウ. 重要な固定資産の売却、除却、滅失等

該当なし

3. 2025 年度の財産及び損益の状況

（単位：百万円）

区 分	2025 年度	2024 年度
経 常 収 益	2,140	2,275
税引前当期一般正味財産増減額	△ 139	94
当期一般正味財産増減額	△ 139	82
正味財産期末残高	4,062	4,207

注：詳細については「貸借対照表」及び「正味財産増減計算書」参照

4. 主要な事業内容

(1) 農薬等の残留性及び毒性に関する各種試験の受託実施

試験の種類	2025年度	2024年度
A:毒性部	44	63
a;慢毒等、亜急性	4	13
b;繁殖・発生毒性	7	13
c;急性、吸入、免疫	17	12
d;神経毒性	6	3
e;遺伝毒性	5	12
f;メカニズム(その他)	5	10
B:化学部	135	176
a;残留分析	81	93
b;家畜残留(その他)	0	0
c;化学分析等	47	69
d;代謝	7	14
C:翻訳・コンサルテーション	64	86
a;ドシエ、翻訳、コンサルタント等	58	79
b;その他、国請負事業等	6	7
D:委託	51	29
a;毒性試験委託	9	9
b;代謝・分析委託	42	20
合計	294	354

注：当該年度に試験を開始した件数

(2) 国関係委託事業等の実施

- ア. 農林水産省（受託者：一般社団法人日本くん蒸技術協会）
 - (ア) 検疫くん蒸剤の安全使用技術確立事業
- イ. 国立医薬品食品衛生研究所
 - (ア) 残留農薬規制における国際調和に資する取組を推進するための研究
(分担研究：食品群の決定に資する農薬の残留指標と手順開発に関する研究)
- ウ. 国立研究開発法人国立環境研究所
 - (ア) ウズラ卵内投与試験法の開発に係る国内バリデーション試験業務

(3) 農薬等の残留及び毒性に関する調査研究

- ア. 調査研究（継続事業：公益目的支出計画実施対象事業）
 - (ア) 化学部
 - ① ヒトにおける代謝物プロファイル推定試験系の確立
 - (イ) 毒性部

- ①毒性試験に用いる実験動物の遺伝学的基盤の整備：アウトブレッドラットの集団により発見された突然変異遺伝子の解析
- ②毒性試験に用いる実験動物の遺伝学的基盤の整備：ウサギの系統差に着目した背景データの蓄積
- ③甲状腺影響を適切に評価するための遺伝学的・栄養学的基盤情報の整備
：本課題では、現状として国内試験機関では対応が困難な発達神経毒性および免疫毒性コホートを含む拡張一世代試験を実施するべく毒性部・化学部が一致協力して基盤整備を図っている。

イ. IET セミナー（継続事業：公益目的支出計画実施対象事業）

2025年10月3日、アルカディア市ヶ谷（私学会館）において、「農薬残留物評価の動向について」と題し、外部講師による講演及び研究員による発表を行った。

（現地参加者 79 名、WEB 参加者 110 名）

講演「農薬残留物リスク評価の国際動向」

発表 ①「メトキシクロル代謝をモデル反応としたヒトにおける代謝物プロファイル推定試験系の検討」

②「水耕栽培法を利用した $[^{14}\text{C}]$ 有機化合物の作物根部からの吸収、移行及び代謝に関する研究」

ウ. 調査研究の成果(公益目的支出計画実施対象事業外)

「事業報告の附属明細書」10 頁参照

(4) 農薬等の残留・毒性に関する技術及び知識の普及

ア. 大学への非常勤講師派遣

① 東京農工大学農学府「発生学」

イ. 講演会等への講師等派遣

① 東京農業大学生命科学部分子生命化学科（2025.10.23）

「農薬の安全性と登録制度について」

② 第 32 回農薬レギュラトリーサイエンス研究会シンポジウム（2025.11.25）

「みどりの食料システム戦略を機会にこれからの規制の科学を考える
：グリホサートの安全性」

ウ. 研修生及び見学者の受入れ

(ア) 研修生

① 2025 年 10 月 14 日～24 日：農薬毒性試験に関する基礎研修（3 名）

② 2025 年 12 月 8 日～ 12 日：作物残留農薬分析研修（3 名）

③ 2026 年 1 月 19 日～ 23 日：土壌・植物中動態試験に関する専門技術研修
(3 名)

(イ) 見学者

① 2025 年 7 月 28 日 横浜農協野菜部飯田支店（14 名）

② 2025年9月1日 茨城県立農業大学校園芸部（15名）

エ. 委員会等への委員派遣

- ・国際毒性病理アカデミー委員【IATP】
- ・眼刺激性ガイドライン専門家委員会委員【OECD】
- ・拡張一世代生殖毒性試験ガイドライン専門家委員会委員【OECD】
- ・ISO 農薬部会委員【JNC/ISO/TC81】
- ・毒性病理用語・診断基準の国際統一化計画推進委員会委員
【日本・英国・EU・米国毒性病理学会】
- ・食品安全委員会動物用医薬品専門調査会専門委員【内閣府】
- ・食品安全委員会器具・容器包装専門調査会専門委員【内閣府】
- ・食品安全委員会ビスフェノール A ワーキンググループ専門委員【内閣府】
- ・食品安全委員会添加物専門調査会専門委員【内閣府】
- ・食品安全委員会栄養成分関連添加物ワーキンググループ専門委員【内閣府】
- ・食品安全委員会肥料・飼料等専門調査会専門委員【内閣府】
- ・残留農薬等試験法開発事業評価会議委員【消費者庁】
- ・食品衛生基準審議会農薬・動物用医薬品部会臨時委員【消費者庁】
- ・薬事審議会化学物質調査会・PRTR 対象物質調査会専門委員【厚生労働省】
- ・農業資材審議会農薬分科会専門委員【農林水産省】
- ・農薬関係調査研究検討会外部委員
【独立行政法人農林水産消費安全技術センター】
- ・木材保存剤等審査会 審査委員会委員【木材保存剤等審査会】
- ・ビスフェノール A に係る国際機関等の評価及び科学的知見の情報収集並びに整理検討会委員【一般財団法人化学物質評価研究機構】
- ・日本農薬分析法部会委員

オ. 客員教授受嘱

- ・東京農業大学【アイソトープセンター（農薬代謝試験の試験方法）】

カ. 留学生

- ・職員名 矢島 智成（化学部残留第1研究室主任）
留学先 National Institute of Environmental Health Sciences (NIEHS)
研究内容 ① ヒト健康への影響が懸念される環境中の化学物質の毒性試験ならびにモニタリング等のための生体試料の化学分析
② 3次元培養スフェロイドを用いた低クリアランス化合物の代謝モデリング
留学期間 2024年4月8日～2026年4月7日
- ・職員名 高橋 尚史（毒性部病理研究室主任）

留学先 National Institute of Environmental Health Sciences (NIEHS)
研究内容 3D HepaRG スフェロイド培養系を用いたチオアセトアミド誘発胆
管線維症の *in vitro* 特性評価および *in vitro* 肝障害予測モデルの開
発
留学期間 2024年4月8日～2026年4月7日

(5) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

ア. 事業の継続に必要なリスク管理と情報交換

(イ) 人材確保の強化

職員の労働安全衛生面からの対策強化として、ストレスチェック分析の精緻化を行うとともに、産業医活用の拡大に向け検討を行った。なお、引き続き精神衛生面での必要に応じたヒヤリング等によるケア対策を施した。また、キャリア採用を通年化するとともに、人材紹介会社の積極的な活用に努めた。

(ロ) 事業に関わるリスク管理の強化

自然災害を含めた緊急時における対応策を定めた危機管理行動マニュアルに基づく迅速な対応と LINE WORKS を用いた職員の安否確認システムによる安全確保及び事業の早急な復旧・継続を図ることに努めた。その他、スパムメール等を検疫する能力の高いメールサーバーへの移行等を実施し、事業遂行において発生し得るリスク軽減に努めた。

(ハ) 組織等の見直し及び業務調整

化学部及び毒性部の受託試験等の中長期的な業務展開を視野に入れ、より専門性を考慮した組織とするよう検討を行った。また、引き続き、ジョブローテーション制度による職員の業務遂行能力の多様性向上・効率化を図った。特に、政府の農薬取締法の一部改正による農薬登録再評価制度に伴う受託試験やコンサルテーション、さらに、国の委託試験が優先して行えるよう調整を図った。具体的には、農薬使用暴露評価試験における試料の化学分析を複数場所試験として実施する受託体制の確立、水域生活環境動植物への長期的な農薬暴露影響試験のうち特にオオミジンコ繁殖影響試験法確立の検討などを行った。

(ニ) 国際実験動物ケア評価認証協会 (AAALAC International) の認証維持

2015年3月16日付けで AAALAC International より取得した完全認証を維持すべく、動物実験委員会を中心に動物愛護・福祉に配慮した実験動物の人的な管理・使用・取扱に関する自主管理体制整備を強化するとともに、ハード・ソフト両面での改善に努めた。また、3年に1回実施される同協会による現地査察 (Site Visit) に備えた。この認証維持のため、今後も引き続き、人的補強やハード面での投資が必要となるが、動物実験等を適正に実施するための必要な認証として捉え、継続的に取り組んでゆく方針である。

(ホ) 試験データの品質管理強化及び試験業務等の効率化

化学部及び毒性部で実施される各種試験から得られるデータのダブルチェックやピアレビュー等の品質管理体制（Quality Control）を強化し、試験データの質的向上を図るとともに、既存の動物観察など日常業務を支援するコンピュータ・システムのさらなるアップデートの検討を行った。特に、我が国の農産物の輸出入に不可欠である検疫くん蒸の残留試験の実施について、国及び民間からの要望に応えるべく対応を強化するため、一般社団法人日本くん蒸技術協会が実施するくん蒸試料調製について当研究所の GLP を適用し、一貫したデータの信頼性を確保するため、当該日本くん蒸技術協会と「GLP 試験に関する合意書」を取り交わすとともに、SOP の整備等の検討を行った。また、今後求められる GLP における Data Integrity（データ保管の完全性、正確性、一貫性、信頼性）の担保に向けた関連機器の整備や体制整備についての検討を定期的に行った。なお、試験事業部・総務部では、所内連絡文書や外部との契約書等を可能な限り電子化し、事務処理能力を高め、作業の迅速化及び効率化を図った。また、人事管理基幹ソフト（奉行クラウド）を導入し、人事管理システムと給与計算システムを統合し、業務効率化を図った。

(カ) 施設整備

施設の老朽化に伴う新棟建設計画について「残留農薬研究所第 4 実験棟建設工事」を決定し、設計者及び建設業者との月 1 回開催の総合定例会及び随時設計者と各研究室担当者とのワークショップ等による継続的な検討を行い、「建築設計・監理委託契約」及び「工事請負契約」の締結に至り、3 月 1 日に着工することができた。

5. 重要な契約に関する事項

業務連携：株式会社エスコ（2021 年 6 月 21 日 HP 公表）

6. 役員会等に関する事項

(1) 理事会

ア. 第 127 回

2025 年 5 月 27 日、一般財団法人残留農薬研究所研究管理棟会議室 4 において開催、議案を付議し、異議なく原案どおり承認された。

第 1 号議案 2024 年度事業報告等に関する件

第 2 号議案 2024 年度貸借対照表及び正味財産増減計算書等に関する件

第 3 号議案 2024 年度公益目的支出計画実施報告に関する件

第 4 号議案 規程類の一部改正に関する件

第 5 号議案 顧問の選任に関する件

第 6 号議案 評議員会の招集に関する件

第7号議案 その他

イ. 第128回

2026年3月31日、一般財団法人法曹会法曹会館（霞が関）において開催、議案を付議し、異議なく原案どおり承認された。

第1号議案 2026年度事業計画及び予算に関する件

第2号議案 2026年度短期借入金の借入限度額に関する件

第3号議案 2026年度資金運用方針に関する件

第4号議案 規程類の一部改正に関する件

第5号議案 業務執行理事の担当業務に関する件

第6号議案 その他

(2) 監事監査

2025年5月27日、一般財団法人残留農薬研究所研究管理棟会議室1において、2024年度事業及び決算に関する監査を受けた。

(3) 第14回評議員会

2025年6月17日、一般財団法人法曹会法曹会館（霞が関）において開催、2024年度事業及び2024年度公益目的支出計画実施について報告した後、議案を付議し、異議なく原案どおり承認された。

第1号議案 2024年度貸借対照表及び正味財産増減計算書の承認に関する件

第2号議案 評議員の選任に関する件

第3号議案 監事の選任に関する件

7. 許可、認可、承認等に関する事項

該当なし

8. 株式を保有している場合の概要

割当株式 株式会社エスコ A種類株式 50株

事業報告の附属明細書

1. 調査研究の成果（公益目的支出計画対象事業）

1) 論文等発表

	なし
--	----

2) 学会・研究会発表

佐藤 旭 富山 成人 小坂 忠司 志賀 敦史 北條 仁 青山 博昭	甲状腺影響を適切に評価するための基盤情報整備～飼料中の植物エストロゲン含量および動物集団の違いが及ぼし得る影響について～ (第52回日本毒性学会, 沖縄, 2025)
--	--

篠田 隼 渡部 隆太 山口 悟 志賀 敦史 西岡 康 浦川 千鶴 遠藤 直子 高橋 研 北條 仁 青山 博昭 佐藤 旭	植物エストロゲン低減飼料が誘発したと考えられるラット児動物の眼球出血および眼球腫大 (第65回日本先天異常学会, 三重, 2025)
---	---

藤原 千夏 松永 あずさ 高橋 尚史 伊藤 強 小山 彩 志賀 敦史 近藤 圭	画像認識AIを活用した甲状腺への毒性影響評価支援技術の検討 (第42回日本毒性病理学会, 愛知, 2026)
---	---

2. 調査研究の成果（公益目的支出計画対象事業外）

1) 論文等発表（下線部が残留農薬研究所職員）

ア. 研究所独自の事業関係

- 2026 石母田 誠、児玉 芽吹、明間 聡史、藤原 千夏、小山 彩、富山 成人、大山 和俊
Makoto Ishimota, Mebuki Kodama, Satoshi Akema, Chinatsu Fujiwara, Aya Koyama, Naruto Tomiyama, Kazutoshi Ohyama

Thermal stress precludes the multigenerational build-up of carbamate tolerance in *Daphnia magna* by offsetting increased antioxidant defenses

Science of The Total Environment 1014, 181349, (2026)

doi.org/10.1016/j.scitotenv.2026.181349

- 2026 石母田 誠、小林 大介、北原 彩、児玉 芽吹、富山 成人、大山 和俊
OECD テストガイドラインにおける給餌量がニクロム酸カリウムのミジンコ繁殖毒性に及ぼす影響

環境毒性学会誌 29, 36-46, (2026)

doi.org/10.1016/j.scitotenv.2026.181349

イ. 国からの委託事業関係 なし

ウ. 学位論文 なし

エ. 共著論文

- 2025 石母田 誠
Kyoshiro Hiki, Kensuke Kito, Tatsuhiko Niino, Hiroshi Honda, Makoto Ishimota, Shiro Kawahara, Yuichi Iwasaki

Harnessing the Taskforce on Nature-related Financial Disclosures (TNFD) for chemical risk management with integrated ecotoxicology and ecology

Environmental Toxicology and Chemistry 44, 303-305, (2025)

doi.org/10.1093/etjnl/vgae051

- 2025 岩崎 楓生
Iwasaki Fuki, Mizuno Akari, Aoyagi Shinobu, Kato Sayaka, Ito Yuki, Kamijima Michihiro, Amaya Toru

Refinement of naphthalene exposure assessment in human biomonitoring based on the synthesis of naphthyl sulfate isomers and HPLC-MS analysis

Chemistry Letters, 54, (2025)

doi.org/10.1093/chemle/upaf106

- 2025 高橋 尚史、志賀 敦史
Yu Harakawa, Minami Shibata, Hiroaki Suzuki, Naofumi Takahashi, Atsushi Shiga, Kosuke Mizuno, Takuomi Hosaka, Ryota Shizu, Jun-ichi Takeshita, Kouichi Yoshinari

Characterization of the toxicological findings from 90-day and 2-year repeated-dose toxicity studies of pesticides in rats

The Journal of Toxicological Sciences 50, 523-546, (2025)

doi.org/10.2131/jts.50.523

オ. その他

- 2025 飯島 和昭、矢島 智成（編集、分担執筆）

第1章 1.1. 試料調製、1.4. 保存安定性と損失防止策、4.3. 受託検査機関、第2章 2.2. 国際会議と欧米の農薬残留ワークショップ

日本の残留農薬分析 ―軌跡と展望―、34-37、366-370、一般社団法人日本農薬学会（2025）

ISBN/978-4-9901417-4-5 C3043

- 2026 石母田 誠

環境毒性学

日本環境毒性学会編 教科書（共著）、384、丸善出版（2026）

ISBN/9784621312322

2) 学会・研究会発表（下線部が残留農薬研究所職員）

ア. 研究所独自の事業関係

- 2025 石母田 誠、北原 彩、児玉 芽吹、明間 聡史、藤原 千夏、小山 彩、富山 成人、大山 和俊
温暖環境がオオミジンコのカーバメート剤耐性獲得に及ぼす影響

(第4回環境化学物質合同大会、第29回環境毒性学会、山形、2025)

- 2026 相田 昌磨、曳埜 忍、近藤 圭、矢島 智成、大山 和俊
ヘッドスペース GC-MS/MS法を用いた農産品中の臭化メチルおよびヨウ化メチル分析法の開発
(第51回日本農薬学会、松江、2026)

イ. 国からの委託事業関係

- 2025 曳埜 忍、矢島 智成、飯島 和昭
残留農薬分析における試料均質性の指標の検討～圃場で農薬散布して栽培したブロッコリーを用いた調査～
(第48回農薬残留分析研究会、東京、2025)
- 2026 岩崎 楓生、土橋 ひかり、近藤 圭、飯島 和昭
農薬の付着特性を考慮した残留濃度予測モデル構築に関する研究
第4報：作物肥大による農薬残留濃度の希釈効果および形態近似幾何モデルに関する調査
(第51回日本農薬学会、島根、2026)
- 2026 飯島 和昭、岩崎 楓生、近藤 圭、渡邊 敬浩
Geometrical and numerical analysis for crop growth effect on pesticide residue dynamics
(American Chemical Society, Spring Meeting, Atlanta, GA, USA, 2026)

ウ. 共同研究

- 2025 岩崎 楓生、伊藤由起、加藤沙耶香、上島通浩
網羅的スクリーニング用 MS2 ライブラリを用いた生物学的モニタリングの可能性
(第98回日本産業衛生学会、仙台、2025)
- 2025 池田 和由、赤羽根 健生、米澤 朋起、近藤 圭、清水 祐吾、小林 由幸、小川 真弘、竹田 至、北本 隼也、岩佐 万実、星川 優美子、飯野 翔平、松本 建、泰永 涼子、久間 達彦、大竹 潤、金岡 怜志、番場 伸一、新延 弘章、上島 仁、福島 勇二、大田 雅照、本間 光貴
AIを活用した農薬の環境生物毒性予測モデルの開発と検証
(第53回構造活性相関シンポジウム、大阪府、2025)
- 2026 池田 和由、米澤 朋起、近藤 圭、赤羽根 健生、清水 祐吾、小林 由幸、小川 真弘、竹田 至、北本 隼也、岩佐 万実、星川 優美子、飯野 翔平、松本 建、泰永 涼子、久間 達彦、大竹 潤、金岡 怜志、番場 伸一、新延 弘章、上島 仁、大塚 大輔、福島 勇二、大田 雅照、本間 光貴
産学共創 AIによる創農薬支援基盤の構築 1：
環境影響予測 AI開発に向けた統合データベースの共同構築
(第51回日本農薬学会、島根、2026)
- 2026 赤羽根 健生、池田 和由、米澤 朋起、清水 祐吾、近藤 圭、小林 由幸、小川 真弘、竹田 至、北本 隼也、岩佐 万実、星川 優美子、飯野 翔平、松本 建、泰永 涼子、久間 達彦、大竹 潤、金岡 怜志、番場 伸一、新延 弘章、上島 仁、大塚 大輔、福島 勇二、大田 雅照、本間 光貴
産学共創 AIによる創農薬支援基盤の構築 2：
ミジンコを対象とした環境生物毒性予測モデルの開発と検証
(第51回日本農薬学会、島根、2026)
- 2026 近藤 圭、池田 和由、赤羽根 健生、米澤 朋起、清水 祐吾、小林 由幸、小川 真弘、竹田 至、北本 隼也、岩佐 万実、星川 優美子、飯野 翔平、松本 建、泰永 涼子、久間 達彦、大竹 潤、金岡 怜志、番場 伸一、新延 弘章、上島 仁、大塚 大輔、福島 勇二、大田 雅照、本間 光貴
産学共創 AIによる創農薬支援基盤の構築 3：
マルチタスク AIを用いた土壌吸着性予測モデルの開発と検証
(第51回日本農薬学会、島根、2026)
- 2026 田中 啓司、田牧 祐治、杉岡 大介
 γ -BHC と α -BHC の共通部分を有する類縁体 (Pentachlorocyclohexane と Heptachlorocyclohexane) の代謝と活性
(第51回日本農薬学会、島根、2026)
- 2025 矢島 智成
Tomonari Yajima, Ed Pursney, Jessica Pierfelice, Jayda Meisel, John Sloop, Suramya Waidyanatha
Development and Validation of a Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry (LC-

MS/MS) Method for Simultaneous Quantitation of 7 Per- and Polyfluoroalkyl Substances (PFAS) in Rat Plasma and Liver

(DTT Poster Showcase, 6th Annual, NIEHS, 2025)

- 2026 矢島 智成

Tomonari Yajima, Wei Qu, A. Cook, M. Rezin, Kristin Aillon, Suramya Waidyanatha, and Stephen S. Ferguson

Investigation of human metabolism of PFAS and low-turnover chemicals in liver spheroid cultures

(The SOT and ToxExpo, 65th Annual Meeting, San Diego, USA, 2026)

- 2026 高橋 尚史

Naofumi Takahashi, P. Pediaditakis, R. Cortes, S. Ferguson, and A. Pandiri

Development of a human-relevant in vitro model of early-stage cholangiocarcinogenesis using HepaRG spheroids

(Society of Toxicology, 65th, San Diego, 2026)

- 2026 高橋 尚史

P. Pediaditakis, Naofumi Takahashi, I. Shats, E. Tokar, and A. Pandiri

Optimization of human ES cell-derived colon organoids for detection of genotoxicity relevant to predictive toxicology

(Society of Toxicology, 65th, San Diego, 2026)